

〔報告〕

看護学生の「活動と休息」の授業理解に影響する要因 —活動に関する個人的経験、自己評価、運動動機づけに焦点を当てて—

香川 里美¹, 南 妙子¹, 栗納 由記子², 名越 民江¹

¹香川大学医学部看護学科,²鳥取大学医学部保健学科

Factors Influencing Nursing Students' Understanding of a Class in "Activities and Rest"
Focusing on Personal Experience Regarding Activities, Self-evaluation, and Motivation for Exercise

Satomi Kagawa¹, Taeko Minami¹, Yukiko Awano², Tamie Nagoshi¹

¹School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University

²School of Health Science, Faculty of Medicine, Tottori University

要旨

本研究の目的は、基礎看護技術「活動と休息」に対する授業理解に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。看護学科1年次生60名を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。回収数は59部（回収率98.3%）で、有効回答率は100%であった。調査内容は、活動に関する個人的経験として、定期的運動、高齢者の世話の経験、体動制限の経験の3項目、学習内容に対する自己評価、運動に対する動機づけ、授業理解度とした。分析は、Mann-Whitney検定、相関係数による相関関係、重回帰分析を実施した。

分析の結果、個人的経験の有無による授業理解度の比較では、定期的運動をしている学生よりも、運動していない学生の方が授業理解度の得点が高かった。個人的経験の有無による学習内容に対する自己評価の比較では、高齢者の世話の経験のある学生は、経験のない学生よりも「応用」の因子得点が高かった。授業理解度に影響する学習内容に対する自己評価を重回帰分析で検討した結果、「応用」「理解興味」「興味喚起」の3因子うち、「応用」が説明変数としてあげられた。

以上のことから、「活動と休息」の授業理解に影響する要因は、学習内容に対する「応用」であった。また、「応用」には、高齢者の世話の経験が関連していた。1年次看護学生の「活動と休息」への授業理解を高めるためには、加齢に伴う身体機能の変化や高齢者への生活援助場面の提示等を授業に取り入れ、授業内容を学生自身の経験や将来の職業等に応用して考えられるような教授方法の工夫が必要である。

キーワード：活動と休息、看護学生、授業理解

Summary

The purpose of this study was to identify factors affecting students' learning and understanding of basic nursing skills related to "Activity and Rest". An anonymous self-administered questionnaire survey was performed involving 60 first-year nursing students. Responses were returned from 59 students (recovery rate: 98.3%). The valid response rate was 100%. The questionnaire inquired about personal experience regarding activities (i.e., regular exercise, caring for elderly persons, and restriction of body movement), self-evaluation of class details, motivation for exercise, and understanding of the class. For statistical analyses, we used the Mann-Whitney test, correlation coefficients, and multiple linear-regression analysis.

A comparison of students' comprehension depending on personal experience showed that students who did not engage in physical activities had a higher level of understanding than those who performed regular physical

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 基礎看護学 香川 里美

Reprint requests to: Satomi Kagawa, School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793, Japan

exercise. Self-evaluation was also compared according to the presence or absence of personal experience, which revealed that the score for the factor of "application" was significantly higher in students with the experience of caring for elderly persons than in those without. Multiple regression analysis was conducted involving the self-evaluation of class details, which influences understanding of the class. This extracted "application" as an independent variable from among "application", "interest in understanding", and "arousal of interest".

Thus, in this study, the "application" of class details was the most influential factor for understanding "Activities and Rest" among first-year students of a nursing department. This factor was also related to the experience of caring for elderly people. To enhance first-year nursing students' understanding of "Activity and Rest", it is necessary for teaching staff to introduce students to age-associated changes in physical functioning and the situations of everyday life assistance for elderly people. The course contents need to be improved to help students apply what they learn in these units to their life experience and future career.

Keywords: Activities and rest, Nursing students, Understanding of a class

はじめに

基礎看護学実習において、看護学生が看護問題としてとりあげている項目に活動と休息がある。杉本¹⁾は、基礎看護学実習で最も多くあがった看護問題は、NANDA-Iの13領域の分類では「活動/休息」であるとし、主要な看護診断ラベルには時間をかけて教授する必要があると述べている。また、「活動・休息援助技術」等の日常生活援助に関する項目は、学生の多くが臨地実習で経験する項目であることから^{2, 3)}、学内において基礎知識の理解ならびにアセスメント能力を高め、臨地実習に臨めるよう教授方法を検討し、支援していく必要がある。

A大学医学部看護学科(以下、A大学)における「活動と休息」の単元は、1年次後期、基本援助技術論(90分×23回)のうち90分×1回の講義で、活動の効果、安静の弊害、睡眠の援助に関する単元として位置づけられており、本単元は体位変換、移送、ボディメカニクス等に関する「姿勢と体位」の単元(講義及び演習)の次に配置している。A大学では、一般目標として「健康にとっての活動・休息・睡眠の重要性とそのメカニズムを理解し、それぞれの援助について学習する」をあげ、行動目標としては、活動および休息と健康との関連、活動と休息の意義・目的、援助の目標、援助内容、アセスメント内容が説明できる等の10項目をあげている(表1)。

前年度、「活動と休息」の授業終了後に、行動目標の達成度について学生による授業評価を行ったところ、活動の意義・目的、活動の援助内容、睡眠に対するアセスメント内容、の項目が他の項目よりも低かった。これらの結果から、「活動」と「休息」の小単元のうち、特に「活動」においては、看護問題を引き出すためのアセスメントに必要とされる意義・目的、具

表1 「活動と休息」の一般目標と行動目標

[一般目標]

健康にとっての活動・休息・睡眠の重要性とそのメカニズムを理解し、それぞれの援助について学習する

[行動目標]

1. 活動・休息・睡眠と健康との関連について説明できる
2. 活動の意義・目的が身体的・心理的・社会的側面から述べることができる
3. 活動の援助の目標について説明できる
4. 活動の援助内容について説明できる
5. 休息の意義について説明できる
6. 疲労の症状について説明できる
7. 睡眠の種類とその特徴について説明できる
8. 睡眠に対するアセスメント内容について説明できる
9. 睡眠障害の原因を環境・心理・身体面から述べる
10. 安眠の援助方法について説明できる

体的な行動計画の立案に必要な活動の援助内容に関する理解が不十分であるということが明らかとなり、学生が理解しやすい授業展開の工夫が課題となった。目黒⁴⁾は、授業者が学習者に授業へのねがいや目標を学ばせるためには、授業に対する姿勢やレディネス、教材に対する興味関心、これまで学習者が経験してきたことと授業との関連を把握することが重要であると述べている。

そこで、本研究では、活動に関する個人的経験、学習内容に対する自己評価、運動に対する動機づけに焦点を当て、「活動と休息」に対する授業理解に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とした。個人的経験には、定期的な運動の有無、体動制限による苦痛の経験の有無、高齢者の世話の経験をあげた。本単元に関する個人的経験とともに、学習内容に対する興味関心を把握し、授業の理解度に影響する要因を明らかにすることは、学生のアセスメント能力を高めるための教授方法の一助となるのではないかと考える。

目的

本研究の目的は、活動に関する個人的経験、学習内容に対する自己評価、運動に対する動機づけに焦点を当て、「活動と休息」に対する授業理解に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。

方法

1. 対象者

A 大学1年次生 60名 (男性6名, 女性54名)

2. 調査時期

平成23年11月

3. 調査内容

1) 授業理解度

授業理解度は、授業の総合的な理解度として学生自身がどう評価しているかを調査するため、「活動と休息」の単元の一般目標と行動目標を提示し、「今日の授業の理解度は、どのくらいですか」の質問項目(1項目)について、「理解できなかった(1点)」から「理解できた(7点)」の7段階で評定した。

2) 個人的経験

本研究では、個人的経験として、定期的運動、体動制限による苦痛の経験、高齢者の世話の経験の3項目を設定した。これら3項目を設定した理由と質問文を以下に述べる。

まず、定期的運動については、活動の意義・目的に関する学生のこれまでの経験を検討し、部活動やスポーツクラブ等で定期的にスポーツに取り組んでいる学生は健康にとっての活動の必要性や効果が理解しやすいのではないかと考え、定期的運動の有無を問うこととした。質問文は、「運動部等の部活動(スポーツクラブ等を含む)で定期的に運動をしていますか(マネージャーは除く)」とした。

体動制限による苦痛の経験については、廃用症候群に関する学生のこれまでの経験を検討し、床上安静の経験や装具装着等による筋力低下や関節の動き難さの経験のある学生は、安静の弊害に関する学習内容が理解しやすいのではないかと考え、体動制限による苦痛の経験の有無を問うこととした。質問文は、「体を動かさないことによる痛みや発赤などの経験はありますか(病气やけがなどによる床上安静時、ギプスやコルセット装着時など)」とした。

高齢者の世話の経験については、活動の援助内容に

関する学生のこれまでの経験を検討し、老人介護施設や家庭内で高齢者の生活援助場面の経験や見学の経験のある学生は、活動の援助内容に関する学習内容が理解しやすいのではないかと考え、高齢者の世話の経験の有無を問うこととした。質問文は、「体力が低下している高齢者の世話や、世話の見学をした経験はありますか(家族との同居、介護の見学、ボランティアなど)」とした。

3) 学習内容に対する自己評価

学習内容に対する自己評価(以下、自己評価)は、桐生⁵⁾の自己評価尺度(8項目)を用い、「全くそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」の5段階で評定した。自己評価尺度は、学習内容に対する「応用(3項目)」「理解興味(3項目)」「興味喚起(2項目)」の3つの因子で構成されている。「応用」は学習内容を自分自身と関連づけて考えられるかどうか、「理解興味」はその日の学習内容への理解や興味、「興味喚起」は授業を受けた科目に対する興味や知識欲が増加したかどうかに関する項目で各々構成されている。自己評価尺度の内的整合性(α 係数)は、応用は0.85、理解興味は0.78、興味喚起は0.87である。

4) 運動に対する動機づけ

運動に対する動機づけ(以下、運動動機づけ)では、活動に関する興味関心として、学生自身がどのような動機づけから運動に取り組んでいるかを測定するために、青年期の学生を対象として作成された藤田ら⁶⁾の運動に対する動機づけ尺度(以下、動機づけ尺度)と同様の質問項目(26項目)を用いた。心身の健康維持のためには継続した運動が必要であり、運動の継続には自己決定的な運動動機づけが必要とされている⁷⁾。この尺度を用いて運動に対する動機づけを評価することにより、運動に対する重要性や価値、あるいは苦痛の認識を評価することができる。下位尺度は、「外的調整(4項目)」「内発的動機づけ(5項目)」「非動機づけ(5項目)」「統合的調整(4項目)」「同一化的調整(4項目)」「取り入的調整(4項目)」の6つの因子で構成されており、体育の授業において運動をする理由をたずねる質問項目となっている。「外的調整」は外的な圧力あるいは周囲の視線を感じることを理由とした項目、「内発的動機づけ」は運動すること自体で得られる喜び、楽しさ、達成感を得ることを理由とした項目、「非動機づけ」は運動する理由がよく分からず、有能さや価値の欠損等が生じていることが記されている項目で構成されている。また、「統合的調整」は運動すること自体を目的としているわけではないが、運動をすることで得られる知識や能力の獲得を理

由とした項目、「同一化的調整」は健康の維持増進のために運動をする価値を見出していることを理由とした項目、「取り入れ的調整」は、恥をかいたり他者から低く評価されるのを避けることを理由とした項目で構成されている。信頼性・妥当性は検証されており、内的整合性 (α 係数) は、外的調整は 0.87, 内発的動機づけは 0.89, 非動機づけは 0.85, 統合的調整は 0.87, 同一化的調整は 0.77, 取り入れ的調整は 0.75 である。本研究では、活動の意義・目的および興味関心の視点から動機づけ尺度を用いるため、質問紙には運動部(またはスポーツクラブ等)での運動または体育の授業において運動をする理由をたずねることとした。「私が運動をしている理由は、～」に続く各項目について質問し、「まったくあてはまらない (1点)」から「非常にあてはまる (5点)」の5段階で評定した。

4. 分析方法

データの分析には、記述統計、差の検定には Mann-Whitney 検定、相関関係には相関係数を用いた分析、授業理解度に影響する自己評価の要因については、重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。なお、統計学的有意水準は 5% 未満とし、統計解析ソフトは SPSS18.0J を使用した。

5. 調査方法

無記名自記式質問紙調査とし、質問紙の配布は研究に直接関与しない教員に依頼した。運動動機づけに関する項目の質問紙は授業開始前に、その他の項目の質問紙は授業終了後に配布し、回収箱にて回収した。回答内容が授業前後で同一の対象であることが明確になるように、質問紙には授業前後で同じパスワードを記載するよう対象者に依頼した。

6. 倫理的配慮

対象者には質問紙調査の目的、調査への協力による不利益は生じないこと、成績とは無関係であること、データは統計的に処理され個人が特定されないこと、調査結果は学会等で公表することについて、書面と口頭で説明し、回収が得られたことで同意を得たものとした。また、質問紙に記載するパスワードは、対象者が自身の好きなアルファベット 1 文字と 4 ケタの数字を書いてもらうようにし、研究者からの個人の特定は一切できないようにした。なお、本研究は研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得ている。

結果

1. 対象者の概要

回収数は 59 部 (回収率 98.3%) で有効回答率は 100% であった。対象者 59 名の個人的経験の有無については、定期的運動を行っている学生は 35 名 (59.3%)、体動制限による苦痛の経験のある学生は 23 名 (39.0%)、高齢者の世話の経験のある学生は 49 名 (83.1%) であった。

2. 個人的経験の有無による授業理解度の比較

授業理解度の得点は平均 5.44 (± 0.77) であった。個人的経験の有無別に授業理解度の得点を Mann-Whitney 検定で比較すると、定期的運動をしている学生よりも、運動していない学生の方が授業理解度の得点が有意に高かった。体動制限による苦痛および高齢者の世話の経験の有無による授業理解度の得点に有意差はなかった (表 2)。

表 2 個人的経験の有無による授業理解度の比較 N=59

	個人的経験	N	Mean \pm SD
定期的運動	あり	35	5.26 \pm 0.66
	なし	24	5.72 \pm 0.86
体動制限による苦痛	あり	23	5.44 \pm 0.89
	なし	36	5.44 \pm 0.70
高齢者の世話	あり	49	5.47 \pm 0.79
	なし	10	5.30 \pm 0.68

3. 個人的経験の有無による自己評価の比較

個人的経験の有無別に自己評価の全体得点を Mann-Whitney 検定で比較すると、高齢者の世話の経験のある学生は、経験のない学生よりも全体得点が有意に高かった。また、個人的経験の有無別に「応用」「理解興味」「興味喚起」の因子得点を比較すると、高齢者の世話の経験のある学生は経験のない学生よりも「応用」の因子得点が有意に高かった。定期的運動と体動制限による苦痛の経験の有無では、自己評価の全体得点および因子得点ともに有意な差は認められなかった。

個人的経験の有無別に自己評価の項目得点を比較したところ、高齢者の世話の経験のある学生は、経験のない学生よりも「応用」のすべての項目得点が有意に高かった。また、体動制限による苦痛の経験のある学生は、経験のない学生よりも「理解興味」の中の『新しい知識を習得できた』の項目得点が有意に高かった。定期的運動の有無による自己評価の項目得点に差はなかった (表 3)。

4. 定期的運動の有無による運動動機づけの比較

運動動機づけの因子得点の平均点は、外的調整 2.01 ± 0.87 , 内発的動機づけ 3.89 ± 0.93 , 非動機づけ 2.20 ± 1.07 , 統合的調整 3.48 ± 0.99 , 同一化的調整 3.77 ± 0.85 , 取り入的調整 2.35 ± 0.97 であった。定期的運動の有無別に運動動機づけの因子得点を Mann-

Whitney 検定で比較すると、いずれも有意差はなかった。しかし、項目得点を比較すると、「非動機づけ」の中の『よくわからない、運動することに価値を感じない』の項目において、運動している学生は、運動していない学生よりも有意に得点が低かった (表4)。

表3 個人的経験の有無による自己評価の全体得点・因子得点・項目得点の比較

N = 59

		定期的運動		体動制限による苦痛		高齢者の世話	
		あり群 N=35	なし群 N=24	あり群 N=23	なし群 N=36	あり群 N=49	なし群 N=10
		Mean ± SD					
	自己評価 全体	あり	3.96 ± 0.70	4.11 ± 0.70	4.06 ± 0.74		
		なし	4.02 ± 0.81	3.90 ± 0.77	3.60 ± 0.65		
因子	応用	あり	3.91 ± 0.67	4.03 ± 0.64	4.03 ± 0.69		
		なし	3.90 ± 0.81	3.83 ± 0.77	3.33 ± 0.61		
項目	学習内容を、自分自身 (これまでの経験や将来の職業等) と関連づけることができましたか	あり	3.97 ± 0.66	4.13 ± 0.55	4.06 ± 0.65		
		なし	4.00 ± 0.66	3.89 ± 0.71	3.60 ± 0.51		
項目	学習した知識 (・技術) を、他の場面 (将来の職業等) に応用する方法が考えられましたか	あり	4.00 ± 0.73	4.04 ± 0.71	4.08 ± 0.75		
		なし	3.83 ± 0.92	3.86 ± 0.87	3.20 ± 0.63		
項目	学習した知識 (・技術) を、自分なりに分析したり、評価したりすることができましたか	あり	3.77 ± 0.60	3.91 ± 0.67	3.94 ± 0.65		
		なし	3.88 ± 0.85	3.75 ± 0.73	3.20 ± 0.63		
因子	理解興味	あり	4.19 ± 0.61	4.33 ± 0.59	4.26 ± 0.68		
		なし	4.27 ± 0.70	4.17 ± 0.68	4.03 ± 0.42		
項目	新しい知識 (・技術) を習得できたと思われましたか	あり	4.24 ± 0.50	4.43 ± 0.51	4.20 ± 0.69		
		なし	4.17 ± 0.82	4.06 ± 0.68	4.00 ± 0.00		
項目	今日の授業の重要事項の意味が理解できましたか	あり	4.17 ± 0.57	4.04 ± 0.71	4.23 ± 0.64		
		なし	4.35 ± 0.65	4.26 ± 0.66	4.20 ± 0.42		
項目	学習内容に対して興味・関心を持っていましたか	あり	4.17 ± 0.75	4.35 ± 0.71	4.31 ± 0.71		
		なし	4.29 ± 0.62	4.14 ± 0.68	3.90 ± 0.57		
因子	興味喚起	あり	3.67 ± 0.76	3.89 ± 0.85	3.82 ± 0.83		
		なし	3.83 ± 0.91	3.64 ± 0.79	3.35 ± 0.67		
項目	もっと知りたい、調べたいと思う内容がありましたか	あり	3.54 ± 0.70	3.78 ± 0.74	3.69 ± 0.74		
		なし	3.71 ± 0.81	3.50 ± 0.74	3.20 ± 0.63		
項目	授業を受けて、この科目に対する興味が増えましたか	あり	3.80 ± 0.80	4.00 ± 0.95	3.94 ± 0.90		
		なし	3.96 ± 1.00	3.78 ± 0.83	3.50 ± 0.71		

Mann-Whitney 検定 *p < 0.05 **p < 0.01

5. 授業理解度と運動動機づけの関連

授業理解度と運動動機づけの各因子の関連を Spearman の順位相関係数を用いて分析したところ、いずれも有意な差は見られなかった (表 5)。

6. 授業理解度に影響する自己評価の要因

授業理解度の得点に影響する自己評価の要因を検討するため、「授業理解度」を従属変数とし、「応用」「理解興味」「興味喚起」を説明変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。分析の結果、「応用」が

表 4 定期的運動の有無による運動動機づけの比較

		N=59		
		因子得点	あり群	なし群
		N =59	N =35	N =24
項 目		Mean ± SD		
外的調整	運動をしないと、自分の居場所が無くなりそうだから	2.01 ± 0.87	2.31 ± 1.05	2.00 ± 0.98
	他の学生と同じ事をしないと淋しい感じになりそうだから		2.11 ± 0.90	2.21 ± 0.83
	他の学生と同じ事をしないと、気まずい感じになるから		1.79 ± 0.64	1.96 ± 0.86
	他の学生と同じ事をしないと、クラスの雰囲気になじめなくなるから		1.89 ± 0.69	1.83 ± 0.89
内発的動機づけ	一生懸命に運動したときの達成感を体験したいから	3.89 ± 0.93	3.94 ± 0.91	4.17 ± 0.87
	夢中になって運動するときの感覚が心地いいから		4.00 ± 1.00	3.63 ± 1.06
	運動すると、さわやかな気分になれるから		3.97 ± 0.92	3.78 ± 0.90
	運動ができたときの喜びを味わいたいから		3.91 ± 0.85	4.04 ± 0.86
	運動をすることでしか経験できない、独自の楽しさを追求したいから		3.83 ± 0.95	3.50 ± 0.98
非動機づけ	よくわからない、運動することに価値を感じない	2.20 ± 1.07	1.60 ± 0.65	2.13 ± 0.90
	よくわからない、練習しても運動が上達するとは思えない		1.91 ± 0.70	2.29 ± 1.12
	よくわからない、運動することは時間の無駄だと思う		1.54 ± 0.56	1.67 ± 0.82
	よくわからない、目標を決めてもやり遂げられるとは思えない		1.97 ± 0.66	2.04 ± 0.96
	よくわからない、運動は苦手なので自分には向いていないと思う		2.47 ± 0.90	2.63 ± 1.01
統合的調整	将来、何かの役に立ちそうな知識が得られそうだから	3.48 ± 0.99	3.26 ± 0.85	3.42 ± 1.10
	人格の形成に役立つ知識が学べる大切な活動 (授業) だから		3.03 ± 0.92	2.83 ± 1.09
	コミュニケーション能力を高めることができる大切な活動 (授業) だから		3.86 ± 0.91	4.13 ± 0.74
	他の学生のことを知ることができる大切な活動 (授業) だから		3.60 ± 0.85	3.79 ± 0.93
的同一調整	運動をしないと、体力が落ちてしまう感じがするから	3.77 ± 0.85	3.74 ± 1.01	3.71 ± 0.46
	必要最小限の体力は付けておいた方がよいから		4.06 ± 0.64	4.00 ± 0.59
	体力が落ちて病気にかかりやすくなると困るから		3.23 ± 1.03	3.58 ± 1.02
	体型を維持しておきたいから		3.91 ± 0.82	3.96 ± 0.56
的取り入れ調整	運動が下手だと格好悪いから	2.35 ± 0.97	2.31 ± 0.68	2.38 ± 0.92
	練習や試合で失敗して、他の学生に迷惑をかけたくないから		2.97 ± 1.10	2.75 ± 1.19
	他の学生ができることを自分ができないのは恥ずかしいから		2.11 ± 0.90	2.00 ± 0.93
	体力が低下した姿を他の学生に見られたくないから		1.97 ± 0.62	2.29 ± 1.00

Mann-Whitney 検定 *p < 0.05

表 5 授業理解度と運動動機づけとの関連

		N=59					
		外的調整	内発的動機づけ	非動機づけ	統合的調整	同一化的調整	取り入れ的調整
授業理解度	相関係数	-.098	.043	-.199	.148	.047	-.075
	有意確率 (両側)	.468	.748	.131	.263	.729	.571

Spearman の相関係数

説明変数としてあげられた。「理解興味」「興味喚起」は授業理解度に影響を及ぼしていなかった(表6)。

表6 授業理解度に影響する自己評価の要因 N = 59

質問項目	β 値	t 値	有意確率
応用	0.327	2.565	0.013

調整済み $R^2 = 0.091$ 重回帰分析(ステップワイズ法)

以上の分析結果を図1に示す。個人的経験の有無による自己評価の比較で有意差のあったのは、高齢者の世話の経験では「応用」の因子および「応用」の中の3項目、体動制限による苦痛の経験では『新しい知識を習得できた』であった。また、定期的運動の有無による運動動機づけの比較で有意差のあった項目は、『運動することに価値を感じない』であった。授業理解度に影響を及ぼしていた要因は、自己評価の「応用」であった。

考察

1. 「活動と休息」の授業理解に影響する要因

「活動と休息」の授業理解度に影響する要因を検討した結果、学習内容を「応用」できることが授業理解度に影響していた。学習内容に対する「応用」が授業理解度に影響することについて、高垣ら⁸⁾は、大学の授業改善に伴う学生の自己評価を分析した中で、情報を受容するだけでなく、自分なりに分析したり評価したりする等の、講義内容を自身で応用する経験を取り入れることが授業の理解度を高めると述べている。また、吉岡⁹⁾は大学生のキャリア意識と授業態度との関連を検討した中で、職業との関連性が見出せない学生は授業を「儀式」としか捉えていないが、授業と希望する職業との関連を解釈し、個々の学生の価値観から必要と思う授業には熱心に取り組むことができると報告している。医学部に入学する学生は、他学部と異なり、医学科・看護学科とも入学時点で将来

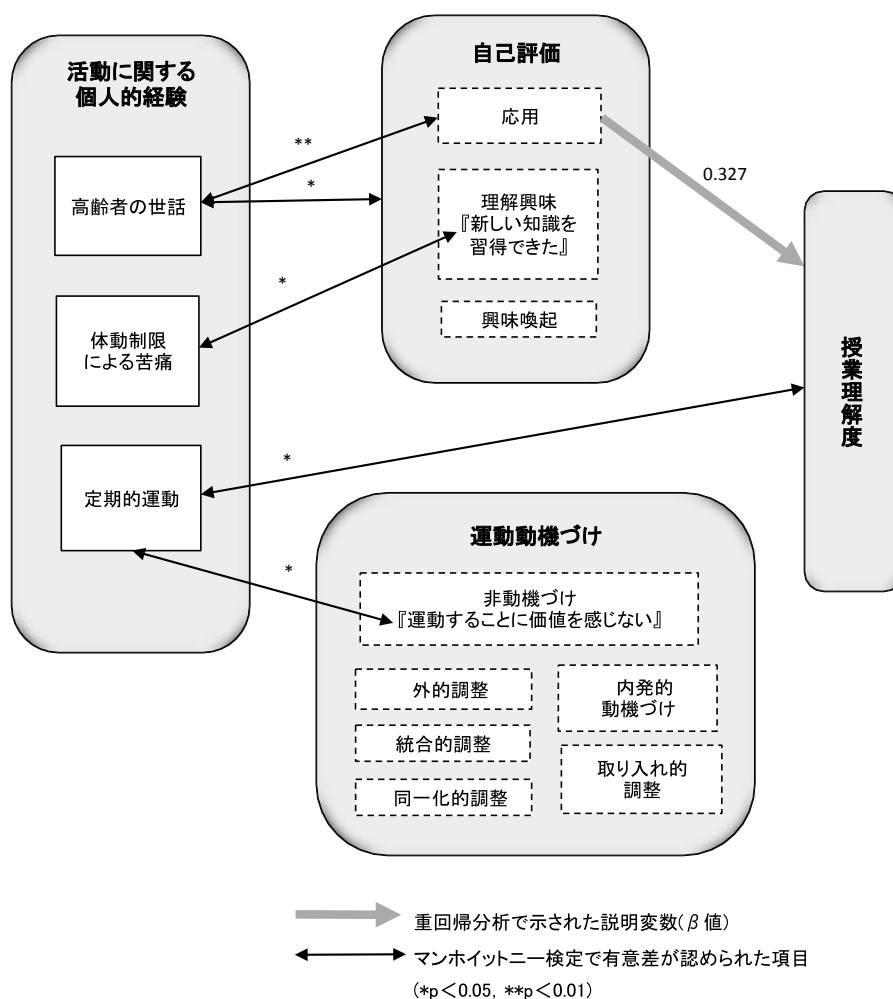


図1 活動に関する個人的経験・自己評価・運動動機づけと授業理解度との関係

医師あるいは看護職になる強い意欲を持っている¹⁰⁾。本研究の対象である1年次の学生は、これまで看護専門科目の授業の受講は少ないが、病院見学実習は終了しており、看護援助場面の見学は経験している段階にある。また、看護学科を志望する学生は、入学当初から看護職としての将来像をイメージしていると予想されることから、「活動と休息」の学習内容を「応用」して考えることができた学生は、病院実習での看護実践場面や学科志望に基づいた将来像との関連から、看護職との関連性を見出すことができ、授業理解に繋がったのではないかと考える。

牧野¹¹⁾は、学生による授業評価の規定因を検討し、授業の概要や目的を理解している学生は、他の学生よりも授業内容に対する評価が高く、学生自身の自己評価においても、これまでの体験と結び付けて理解することや学習意欲が高いことを明らかにしている。本研究において、学習内容をこれまでの経験や職業等と結び付けて理解できた学生は授業理解度が高かったことから、授業理解度を高めるためには、授業内容が看護職と関連付けられるような工夫や、授業の概要及び目的を理解できるよう、授業開始時の説明内容に十分に組み込むことが重要であると考えられる。

2. 個人的経験と自己評価および授業理解度との関連

個人的経験の有無による自己評価の比較において、高齢者の世話の経験のある学生は、学習内容に対する「応用」の得点が高かった。今回の授業では、活動に関する授業内容の一つに、長期臥床による廃用症候群や日常生活援助についての内容を組み込んでいる。看護学生の高齢者のイメージは、加齢に伴う機能低下や形態の変化および疾病等、身体機能の低下に関するイメージが多いとともに、祖父母やボランティア等で接する高齢者との生活体験が影響することが報告されている^{12, 13)}。本研究において、高齢者の世話の経験のある学生が、経験のない学生よりも「応用」の得点が高かったことは、高齢者と接した経験が、加齢に伴う生活の変化や健康障害による身体機能および活動の低下に対するイメージへと繋がり、活動と休息の授業内容を学生自身の経験に応用して捉えることができたのではないかと考える。

また、体動制限による苦痛の経験のある学生は、経験のない学生よりも『新しい知識を習得できた』と答えた学生が多かった。体動制限による苦痛経験のある学生は、学習内容を学生自身が経験した床上安静による痛みや、ギプスやコルセット等装具装着後の筋力低下・関節の動き難さ等の経験と重ね合わせて理解する

ことができ、体動制限を強いられる患者のイメージや援助内容を『新しい知識』として習得できたのではないかと考える。今後は、学生が身近に体験する活動や休息に関する苦痛経験の内容を明らかにするとともに、看護援助に「応用」して考えられるよう具体的なイメージをもとにした授業展開を検討していく必要がある。

個人的経験の有無による授業理解度の比較では、定期的運動をしている学生よりも、運動していない学生の方が授業理解度の得点が高かった。運動をしていない学生は、活動量が低下している自己の状況を講義内容の安静がもたらす身体への弊害と重ね合わせることで興味を持ちやすく、授業理解に繋がったのではないかと考える。一方、運動をしている学生は、運動動機づけの中の、『運動することに価値を感じない』の項目得点が低かったことから、運動に対する価値は見出しており、健康に対する活動の必要性は理解していると考えられる。しかし、この『価値』は、スポーツの観点からの『価値』であり、病をもつ人への活動の必要性の観点までには繋がりにくかったと考えられる。

以上のことから、1年次の段階にある学生は、看護に対する専門的知識が浅いため、学習内容を看護実践に関連づけて考えることは難しい状況にある。しかし、身近に存在する高齢者との関わりや体動制限による苦痛体験、活動量の低下といった自身の経験を学習内容に重ね合わせて考え、理解していることが明らかとなった。特に、高齢者と関わった経験は、援助が必要な患者のイメージへと発展しやすく、活動の必要性や日常生活援助と関連づけて考えやすいと推察する。したがって、1年次における「活動と休息」の授業理解を高めるためには、高齢者の生活援助場面の様子を描いた視聴覚教材の提示、祖父母等加齢に伴う身体機能の変化や老人介護施設等での高齢者と触れあった場面を想起させる等、高齢者がイメージできるような内容を授業に取り入れ、学習内容を学生自身の経験や将来の職業等に応用して考えられるような教授方法が重要であると考えられる。

研究の限界と今後の課題

本研究では「活動と休息」の授業の総合的な理解度に影響する要因を検討したため、「活動と休息」の単元の行動目標の各項目における理解度の検討には至っていない。今後は、休息に関する個人的経験の内容も調査検討に加え、さらに学生が授業に興味関心を持ち、授業理解度が高まるよう教授方法の検討が必要である。

結論

看護学科1年次生の「活動と休息」の授業理解に影響する要因は、学習内容に対する自己評価の「応用」「理解興味」「興味喚起」のうちの「応用」であった。また、学習内容に対する「応用」は、高齢者の世話や世話の見学の経験が関連していた。1年次看護学生の「活動と休息」への授業理解を高めるためには、加齢に伴う身体機能の変化や高齢者への生活援助場面の提示等を授業に取り入れ、授業内容を学生自身の経験や将来の職業等に適用して考えられるような教授方法の工夫が必要である。

文献

- 1) 杉本幸枝：基礎看護学実習Ⅰの受持患者の分析からみた看護過程教授方法の検討，新見公立短期大学紀要，28，23-27，2007.
- 2) 横柑富貴子，清水佐智子，緒方重光：臨地実習における技術経験の現状と課題，鹿児島大学医学部保健学科紀要，19，65-70，2009.
- 3) 西田慎太郎，矢野紀子，青木光子，他：臨地実習における看護技術経験の実態，愛媛県立医療技術大学紀要，5(1)，105-112，2008.
- 4) 目黒悟：看護教育を創る授業デザイン，教えることの基本となるもの，44-61，(株)メヂカルフレンド社，2012.
- 5) 桐生直幸：大学の英語授業における学生の評価要因の分析—英語に対する興味に焦点を当てて，鎌倉女子大学紀要，15，63-73，2008.
- 6) 藤田勉，佐藤善人，森口哲史：自己決定理論に基づく運動に対する動機づけの検討，鹿児島大学教育学部研究紀要，61，61-71，2010.
- 7) 松本裕史，竹中晃二，高家望：自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度の開発—信頼性および妥当性の検討，日本体育協会スポーツ医・科学研究報告，1，147-155，2003.
- 8) 高垣マユミ，田爪宏二：大学の授業改善に伴う学生の自己評価の変容の分析，日本教科教育学会誌，28(4)，1-9，2006.
- 9) 吉岡一志：キャリア意識からみた大学生の授業へのまなざし，山口県立大学学術情報，4，19-25，2011.
- 10) 宮武伸行，平尾智広：香川大学医学部におけるカリキュラム・授業等についての評価，香川大学看護学雑誌，16(1)，75-83，2012.
- 11) 牧野幸志：学生による授業評価の規定因の検討(4)，授業概要の認知度が授業評価に与える影響，摂南大学経営情報学部論集 12(2)，1-20，2005.
- 12) 近藤ふさえ，丸山昭子：看護学生の高齢者とのかわり体験と高齢者イメージとの関連性，日本医学教育学会誌，13，18-25，2004.
- 13) 梶谷みゆき，倉鋪桂子：看護学生の老人イメージに関する研究，島根県立看護短期大学紀要，5，101-107，2000.